

# メールマガジン「ガゼッタ」まとめ(3)

第 11 号～第 15 号 (2012 年 12 月 5 日～2013 年 1 月 15 日配信)

配信した「ガゼッタ」No.11-15 のまとめです。書式と一部表記を変更して図版を取り込み、pdf にしました。



ガゼッタ第 11 号をお届けします。

はじめに、11 月 26 日の日本ロッシェニ協会演奏会「歌劇《セミラーミデ》抜粋：ピアノ伴奏による楽曲セレクション」（さくらホール）にご来場いただきました皆様と、会員の皆様に御礼申し上げます。おかげさまで大好評のうちに終了することができました。HP に掲載した来場御礼は、<http://societarossiniana.jp/concert.html> をご覧ください。

さて、今回のガゼッタは現在新国立劇場で上演されている《セビリアの理髪師》にちなみ、このオペラの邦題（日本語題名）についてお話させていただきます。

## ▼ 《Il barbiere di Siviglia》の邦題（日本語題名）について▼

このオペラは広く知られているように、初演時の題名は《Almaviva, o sia L'inutile precauzione（アルマヴィーヴァ、または無益な用心）》でした。けれども最初の再演以後《Il barbiere di Siviglia》として流布・定着したことから、一般には後者の題名が使われており、そのこと自体になんの問題もありません。その一方、このオペラには深刻かつ未解決の問題が残されています。それが「《Il barbiere di Siviglia》に定訳が無い」という問題です。事実、過去四半世紀の間、上演・放送・出版媒体ごとに次の訳題が使われてきました。

- 《セビリアの理髪師》（NHK、新国立劇場）
- 《セビリアの理髪師》（藤原歌劇団）
- 《セヴィリアの理髪師》（旧・二期会）
- 《セヴィリアの理髪師》（ポローニヤ歌劇場来日公演）
- 《セヴィラの理髪師》（東京オペラプロデュース）

これで 5 種ですが、筆者が日本ロッシェニ協会紀要『ロッシェニアナ』で頻繁に用いるのはそのどれでもない《セビーリアの理髪師》ですから、これを加えた 6 種が現代日本における《Il barbiere di Siviglia》の訳題となります。時代を遡って調べると、実はこの 6 種とは別な訳題の方が多く使われていた、ということが判ります。1917（大正 6）年に行われた日本初演の題名は《シキルリアの理髪師》もしくは《シキルリアの理髪師》〔註 1〕、その後、大正から昭和の初期にかけて、《セビラの理髪師》《セヴィラの理髪師》《セヴキラの理髪師》《セビールの理髪師》が上演や演奏時の題名に使われているのです。「理髪師」の代わりに「床屋」を用いる訳題もありますから、実数はさらに多くなります。

いまどき《シキルリアの理髪師》と書く人はいませんし、「床屋」の方が「理髪師」より適訳と主張する人もいません。ですから現在の問題は、地名「Siviglia」のカタカナへの置き換えに絞られるわけです。そもそも原題の「Siviglia」はスペインの地名「Sevilla」のイタリア語表記で、オペラの中ではイタリア語で「シヴィーリア」と発音されますが、それを邦題に用いる必然性はゼロです（それゆえ《シヴィーリアの理髪師》や《シヴィーリアの理髪師》はありません）。

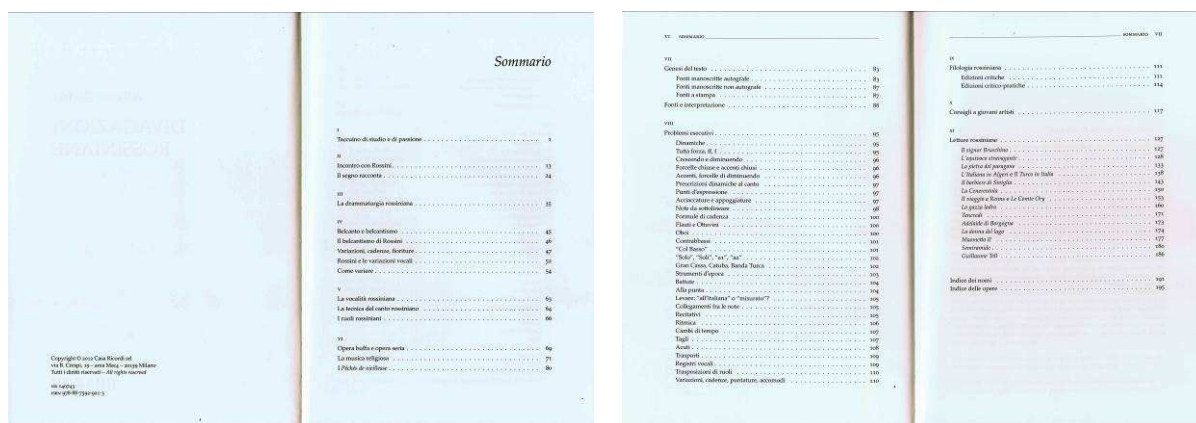
前記の訳題のうち、戦後世代に一番馴染みのあるのは間違いなく《セビリアの理髪師》でしょう。手元にある『広辞苑』（第 3 版）も地名に「セビリア」を用い、NHK でも基本的に「セビリア」と称しているからです。ところが戦前は違いました。その証拠に、ポーマルシェの原作は昭和 2 年に『セキルの理髪師』の題名で出版されています（井上勇 訳、聚英閣）。作者の名前も「ポーマルシェ」ではなく「ボオマルセエ」です。昭和 13 年に出版された岩波文庫の題名は『セヴィラの理髪師』で、その後半世紀の間、この題名のまま再版されています（進藤誠一訳。さすがに作者名は、ある段階で「ポーマルシェ」に変わりましたが……）。ですから戦中戦後の文化人は、この作品を『セヴィラの理髪師』と記憶していたはずですが。

戦後のいつ頃、どのような経緯で「セビリア」となったかは国語学者にご教示いただかないと判りませんが、文部省や NHK の採用あってのことでしょう。音楽用語も教育現場ではヴァイオリンではなく「バイオリン」、ヴェルディではなく「ベルディ」が戦後長く使われ、NHK も後者を正式採用してきました。でも、現在まともな音楽研究者の中に、「ベルディ」「ビバルディ」「バイオリン」と書く人は一人もいません。

では、なぜ私は前記のどれとも違う《セビーリアの理髪師》を採用してきたのでしょうか。答えは簡単です。地名は原語の現地発音のカタカナへの置き換えが理に適っている、と考えてのことです。日本ロッシェニ協会を設立し、紀要を発行することになったとき、その編集を私が務めることになりました。そして私は創刊号（1996 年 2 月発行）に『標準的日本語表記の提案』と題する文章を寄せ、「あくまで提案者による試案」と断りつつ、幾つかの訳題を紀要で使用すると表明しました。その一つが《セビーリアの理髪師》で、慣用として音引きを持

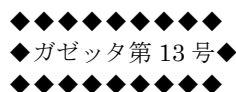


- IV ベルカントとベルカンティズム／ロッシェーニのベルカンティズム／ヴァリエーション、カデンツァ、装飾／ロッシェーニと歌の変奏／どう変奏するか
  - V ロッシェーニ作品の発声法／ロッシェーニ作品の歌唱技術／ロッシェーニ作品の役
  - VI オペラ・ブッフアとオペラ・セーリア／宗教音楽／老いの過ち
  - VII テキストの諸相（自筆楽譜／自筆でない手書き譜／印刷譜）／典拠と演奏
  - VIII 演奏の諸問題（ディナーミク／トゥッタ・フォルツァ、ff、f／クレシェンドとディミヌエンド／閉じたヘアピン記号と閉じたアクセント記号／アクセント記号、ディミヌエンドのヘアピン記号……以下、省略します）
  - IX ロッシェーニ作品の考証（批判校訂版／批判=演奏版）
  - X 若き演奏家への助言
  - XI ロッシェーニ作品の読解（ブルスキーノ氏／ひどい誤解／試金石／アルジェのイタリア女とイタリアのトルコ人／セビーリャの理髪師／ラ・チェネレントラ／ランスへの旅とオーリー伯爵／泥棒かささぎ／タンクレディ／ブルグントのアデライデ／湖の女／マオメット2世／セミラーミデ／ギョーム・テル）
- 人名索引  
作品索引



長年の研究と演奏実践に基づくロッシェーニ解釈のエッセンスを伝えたい、との情熱が文章に満ち溢れる名著ですが、多くの問題が略述されており、専門家でないと十分な理解は難しいようです。その意味で本書は単に日本語に訳されるだけでは足りず、ゼッダ先生の言わんとすることを汲み取って判りやすく説明する必要があるでしょう。ゼッダ先生の教えを広めるのも研究者の責務。筆者も微力ではありますが、例会や講座、『ロッシェーニアーナ』の論考を通じて日本のロッシェーニ学の確立に努めたいと思います。

(2012年12月15日 水谷彰良)



◆ガゼッタ第13号◆



ガゼッタ第13号をお届けします。

12月15日に日本ロッシェーニ協会紀要『ロッシェーニアーナ』第33号を発行し、12月22日のリニューアル例会第2回「映画『ロッシェーニ！ ロッシェーニ！』鑑賞会」も無事終了しました。11月の演奏会も含め、今年9月のホームページ・リニューアルに始まった協会の刷新も順調に進んでいます。

さて、今年最後のメルマガは、ROFの上演DVD2点、来年のお薦めロッシェーニ演奏会、2013年ROFの告知です。意外にアッサリですが、年末年始にもHPへの原稿アップをするつもりなので、ときどき覗いていただければ幸いです。

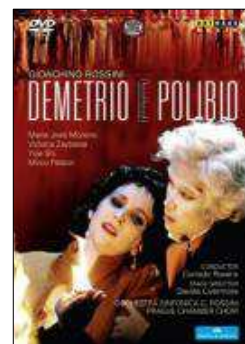
### ▼ROF2010年《デメトリオとポリビーオ》DVD&BD発売！▼

◎Rossini: Demetrio e Polibio.(Rossini Opera Festival 2010)

ロッシェーニ：歌劇《デメトリオとポリビーオ》2010年ロッシェーニ・オペラ・フェスティバル

ダヴィデ・リヴェルモア(演出) コッラード・ロヴァリス指揮 G.ロッシェーニ交響楽団、ブラハ室内合唱団 マリア・ホセ・モレノ(S) ジヴェーノ・ヴィクトリア・ザイチェヴァ(Ms) シー・イージェ(T) ミルコ・パラッツィ(B)

[Arthaus Musik 108061](BD) [Arthaus Musik 101647](DVD) 日本語字幕付き



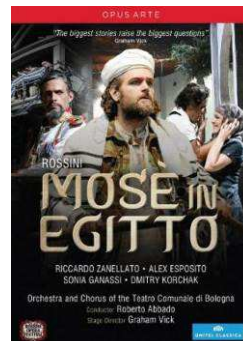
すでにお求めの方も多いと思いますが、2010年 ROF《デメトリオとポリービオ》の上演映像が DVD と BD (ブルーレイディスク) で発売されました。嬉しい日本語字幕付き。

リヴェルモアの演出は、劇場に住みつくオペラ歌手の幽霊が夜な夜なこのオペラを演じるとの設定で、掌から鬼火を立て、幽霊ゆえ神出鬼没。そこが面白いと思うかどうかは見る人次第です。音楽の半分ほどがロッシーニの作曲で残りは他の作曲家ですが、モーツァルトやチマローザの時代の雰囲気もあって思いのほか楽しめます。

### ▼ROF2011年《エジプトのモゼ》DVD&BD 発売！▼

#### ◎Rossini: Mose in Egitto.(Rossini Opera Festival 2011)

ロッシーニ：歌劇《エジプトのモゼ》2011年ロッシーニ・オペラ・フェスティバル  
グレアム・ヴィック(演出) ロバート・アッパード指揮ボローニャ市立劇場管弦楽団、  
同合唱団 ソニア・ガナッシ(Ms) オルガ・センデルスカヤ(S) デイミトリー・コルチ  
ャック(T) アレックス・エスポージト(B-Br) リッカルド・ザネッラート(B)ほか  
ダヴィデ・リヴェルモア(演出) コッラード・ロヴァリス指揮 G.ロッシーニ交響楽団、  
プラハ室内合唱団 マリア・ホセ・モレノ(S) ジヴェーノ・ヴィクトリア・ザイチェ  
ヴァ(Ms) シー・イージェ(T) ミルコ・パラッツィ(B)  
[Opus Arte OABD7112D](BD) [Opus Arte OA1093D](DVD)



昨年のフェスティバルで大反響を呼んだヴィック演出《エジプトのモゼ》。モゼ(モーセ)をテロリストのウサマ・ビン=ラーディンになぞらえた演出と舞台についてはすでにあちこちに書かれていますので省略しますが、あらためて映像で見ると感慨無量です。残念なのは日本語字幕の無いこと(なぜかイタリア語の字幕も無い)。クリスマスには不向きですが、ロッシーニ・ファンのみならずオペラ愛好家必見の上演映像です。

### ▼お薦め演奏会：東フィルのロッシーニ《小荘厳ミサ》2013年1月17日と18日▼

東京フィルハーモニー交響楽団定期演奏会

2013年1月17日(木) 19:00 東京オペラシティ コンサートホール(第75回 東京オペラシティ定期シリーズ)

2013年1月18日(金) 19:00 サントリーホール(第825回 サントリー定期シリーズ)

指揮：ダン・エッティンガー ソプラノ：ミシェル・クライダー、アルト：エドナ・プロフニック、テノール：ハビエル・モレノ、バス：堀内康雄 合唱：新国立劇場合唱団

ヴェルディ&ヴァーグナーの記念年の幕開けにふさわしい演奏会が、東京フィルハーモニー交響楽団定期演奏会のロッシーニ《小荘厳ミサ》(管弦楽伴奏版)です(笑)。面白いことに、6月にはN響がチョン・ミョンフン指揮でロッシーニの《スタバト・マーテル》を取り上げます。実はロッシーニの記念年、だったりして……

《小荘厳ミサ》の管弦楽伴奏版はオリジナル編成ヴァージョンにひけをとらぬ傑作ですが、その演奏に日本で接する機会は稀、これは聴き逃せません。プレスリリース(PDF版)は<http://societarossiniana.jp/TPO.pdf> (PDF 315KB)をご覧ください。せっかくの演奏会なのに、案内文から作品の意義がまるで読み取れないのは何故でしょう……実に不思議です。

### ▼2013年のROF正式発表▼

2013年 ROF の正式告知が12月5日にありました。主演目は《ギョーム・テル》《アルジェのイタリア女》《なりゆき泥棒》、演奏会形式《湖の女》です。詳細はこちらをご覧ください(PDF版)。

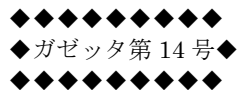
<http://www.rossinioperafestival.it/intra/upload/news/file/ProgrammaPreliminare2013.pdf>

来年も良い年でありますように！

(2012年12月25日 水谷彰良)

#### ★HP管理人より★

本年8月末にHPを引き継ぎ、9月よりメルマガ「ガゼッタ」を発行してから、今回で13回目となりました。皆様、お楽しみいただいておりますでしょうか。現在、毎月5日、15日、25日の正午に配信するようにしておりますが、ご意見等ございましたら、[webmaster@societarossiniana.jp](mailto:webmaster@societarossiniana.jp) までメールでお願いいたします。引き続き来年もどうぞよろしくお願いいたします。



ガゼッタ第14号をお届けします。

新年あけましておめでとうございます。今年のオペラ界はヴェルディとヴァーグナーの生誕 200 周年一色のようですが、どっこいロッシーニも負けていません。というのも 2013 年は 1 月 27 日に《ブルスキノ氏》、2 月 6 日に《タンクレーディ》、5 月 22 日に《アルジェのイタリア女》、12 月 26 日に《パルミラのアウレリアーノ》と、四つのオペラの初演 200 周年でもあるからです。来年は《イタリアのトルコ人》、再来年は《イングランド女王エリザベッタ》、次の年は《セビーリヤの理髪師》……と毎年、初演 200 周年が続きます。5 年後の 2018 年にはロッシーニ没後 150 周年を迎えます。そう考えると、現在のロッシーニ・ファンはとても幸せな時代を生きていることが判ります。日本ロッシーニ協会も有意義な活動を展開したいと考えていますので、応援のほど、よろしく願いいたします。

新年早々のガゼッタでは、ゼッダ先生 85 歳の誕生日、ドニゼッティ研究所ウェブサイト誕生などの話題を提供します。

#### ▼アルベルト・ゼッダ先生 85 歳の誕生日！▼

日本が世界一の長寿国でも、アルベルト・ゼッダ先生のようにエネルギーで才気あふれるマエストロはいません。1928 年 1 月 2 日、ミラーノに生まれた先生は 85 歳になられましたが、ますますお元気で指揮者・教育者としての活動を続けておられます。

85 歳の誕生日祝いに、ドイツ・ロッシーニ協会副会長・事務局長のレート・ミュラーが作成した「祝賀写真コレクション」をご覧ください。

[http://www.rossinigesellschaft.de/members/azedda/AZ\\_85.jpg](http://www.rossinigesellschaft.de/members/azedda/AZ_85.jpg)

私も 1 月 2 日、日本ロッシーニ協会からのお祝いメールをゼッダ先生宛てに送信しておきました。

#### ▼「ドニゼッティ研究所 Web Site」誕生！▼

昨年のクリスマスに、「ドニゼッティ研究所 Web Site」開設のお知らせを、代表責任者の高橋和恵さんからいただきました。高橋和恵さんはドニゼッティ歌曲研究の第一人者。グリエルモ・バルブラン／ブルーノ・ザノリーニ著『ガエターノ・ドニゼッティ ロマン派音楽家の生涯と作品』（1998 年、昭和音楽大学。2000 年新装限定版、ショパン）の翻訳者にして日本ロッシーニ協会の会員でもあります。

ベルガモ市、ドニゼッティ財団、ドニゼッティ音楽資料館などの協力と正式許可を得てドニゼッティの誕生日（11 月 29 日）に開設されたこのウェブサイトは、日本におけるドニゼッティ研究の拠点となることでしょう。すでにたくさん情報が掲載されていますので、下記のサイトをご覧ください。

<http://www.studio-donizetti.jp/>

日本の本格的ドニゼッティ研究はこれが出発点。すべては高橋さんの双肩にかかっていると言っても過言ではありませんが、孤軍奮闘とならぬよう日本ロッシーニ協会として、また個人として協力していこうと考えております。

#### ▼日本語によるロッシーニ・オペラ目録と批判的注釈について▼

昨年 12 月 5 日発行のガゼッタ第 11 号に、《Il barbiere di Siviglia》に定訳が無いという話を書きました。これと絡めて当協会 HP に年末駆け込みで「ロッシーニ・オペラ作品表」ならびにその注釈に当たる「日本語によるロッシーニ・オペラ目録（批判的注釈付）」PDF をアップしました。下記をご覧ください。

[http://societarossiniana.jp/list\\_rossini\\_opera.html](http://societarossiniana.jp/list_rossini_opera.html)

[http://societarossiniana.jp/rossini\\_opera\\_list.pdf](http://societarossiniana.jp/rossini_opera_list.pdf)

これは媒体ごとにバラバラなオペラの日本語題名をどのような基準で再検討すべきか、との視点も備えた拙論で、対象をロッシーニに限定しましたが、ヴェルディを含む 19 世紀イタリア・オペラ全般に適用可能な問題提起となっています。そしてこれが、この問題に関する日本で最初の論考であるという事実を踏まえれば、より広範な議論が必要であるのは言うまでもありません。

みなさんには、「日本語によるロッシーニ・オペラ目録（批判的注釈付）」への忌憚のない批判や助言をお願いいたします。誤謬と判断すれば公式に改めますし、重要な異論や異説があれば随時 HP やガゼッタに掲載させていただきます。だからといってその邦題を定訳として採用せよ、などと言うつもりはありません。訳題や邦題は、よほどの間違いでなければ書き手の自由裁量と考えるからです。今後、日本ロッシーニ協会の紀要と HP でこの作品表の邦題を使用しますが、それは協会の基本姿勢というだけの話。筆者としては理解者が増えることを願っていますが、物事が変わるには時間もかかります。

とはいえ個人や団体次第であつという間に物事を変えられる、というのもまた事実です。《アルジェのイタリア女》を例にとると、1967 年 9 月 28 日に東京藝術大学（第 13 回藝大オペラ公演）が行った日本初演は《アルジェリアのイタリア人》でした（原語上演）。1970 年に出版されたフランシス・トイ『ロッシーニ 生涯と芸術』（加納泰・訳。音楽之友社）は『アルジェリアのイタリア娘』を採用し、2 番目の上演に当たる 1972 年 7 月ステファノ・オペラ劇場公演は《アルジェリアのイタリア女》とされました（訳詞上演）。現在使われる《アルジェのイタリア女》はその 4 年後、1976 年 3 月に東京室内歌劇場が行った公演が最初です。つまり、僅か 10 年で「アルジェリアのイタリア人」⇒「アルジェリアのイタリア娘」⇒「アルジェリアのイタリア女」⇒「アルジェのイ



10,800 円) の販売は 2 月 9 日からだそうです。(問い合わせ: 東京フィルチケットサービス 03-5353-9522 <http://www.tpo.or.jp>)

85 歳を迎えてますますお元気なマエストロ・ゼツダ。ペーザロでは勿論ですが、その直後の日本でも素敵な音楽を楽しみましょう。以上、お知らせまで。

(2013 年 1 月 5 日 朝岡 聡)



ガゼッタ第 15 号をお届けします。

本号では、ゼツダ先生からのメッセージ、オルガンとピアノの四手連弾用に編曲されたロッシェニ作品 CD、《スタバト・マーテル》木管・金管アンサンブル編曲 DVD の話題を提供します。最後に余分なお知らせもあります。

#### ▼アルベルト・ゼツダ先生からのメッセージ▼

ガゼッタ第 14 号に、アルベルト・ゼツダ先生 85 歳の誕生日を祝うメールを送信したと書きましたが、先日先生から返礼のメールをいただきました。その一部を翻訳しておきます。

大変うれしいお祝いの言葉に、すぐに再会できる期待とともに心よりお礼申し上げます。私たちの最愛のロッシェニのために行っているすべてに感謝します。喜びと、満足と、音楽に富んだ素晴らしい 2013 年のために、愛しい [日本の] ロッシェニの友人たちにも、たくさんの愛をこめた挨拶をおくります。 アルベルト

ゼツダ先生は、9 月の来日をとても楽しみにしておられます。

#### ▼ピアノやオルガンの四手連弾によるロッシェニ作品 CD▼

オペラ・ファンには器楽に関心のない人が多いようです。ロッシェニ・オペラ・フェスティバルでロッシェニのピアノ曲や室内楽の演奏会があっても聴衆が 100 人を越えることはなく、会場係を含めていつも 60~70 人しかいません。確かにロッシェニのピアノ曲は「一部マニア」のものかもしれませんが、耳馴染みのあるロッシェニのオペラのピアノやオルガン編曲には違った面白さがあるはずです。ここではオルガン四手連弾とピアノ四手連弾によるロッシェニ作品の CD を紹介します。

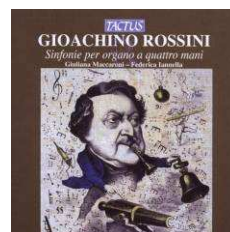
##### ◎Gioachino Rossini: Sinfonie per organo a quattro mani

ロッシェニ: オルガン四手連弾によるロッシェニ序曲集

(《泥棒かささぎ》《セビーリヤの理髪師》《セミラーミデ》《タンクレーディ》《アルジェのイタリア女》《ギヨーム・テル》の序曲)

録音: 2007 年 トリーノ [Tactus TCSS015]

演奏: ジュリアーナ・マッカローニ / フェデリーカ・イアンネッラ (オルガン四手連弾)



これは目茶目茶楽しい CD です。オルガン四手連弾の演奏自体が珍しいだけでなく、シンバルや鐘も組み込んだ 1821 年製のパイプオルガン (カルーゾの聖母マリア昇天教区教会) を使用し、オルガニストたちの編曲・演奏も見事です。音色も多彩。パイプオルガンでは苦手なはずの同音連打やスピーディなパッセージも巧みに奏され、電子楽器の疑似オーケストラとは異なる重厚かつ豊かな響きを堪能させてくれます。

ちなみに 19 世紀前半のイタリアの教会では、礼拝の際に宗教音楽ではなくロッシェニのオペラの楽曲がオルガンで演奏され、外国人の観光客を驚かせました。軍楽隊のレパートリーも同様で、オペラに無縁な人々も教会や広場でロッシェニの音楽を楽しむことができたのです。

##### ◎Rossini: Opera for piano duet

ピアノ四手連弾編曲によるロッシェニのオペラ

(《泥棒かささぎ》《アルジェのイタリア女》《ギヨーム・テル》序曲、《セビーリヤの理髪師》より序曲ほか)

録音: 2011 年 ブリュッセル [Pavane Records ADW 7540]

演奏: Duo Solot (ステファニ・サルミン & ピエール・ソロ)

アルノルト・シェーンベルクがロッシェニの《セビーリヤの理髪師》全曲をピアノ四手連弾用に編曲したことは以前から知られていましたが、ディスクは絶無でした。その世界初録音を含むのが、2011 年 4 月に録音されたこの CD です (収録曲はすべて世界初録音)。

《泥棒かささぎ》《アルジェのイタリア女》序曲はボズナン生まれの作曲家クラインミケル (Richard Kleinmichel, 1846-1901) の編曲ですが、単に原曲をピアノに置き換えただけで面白味はありません。シェーンベルク (1874-



1951) の《セビーリヤの理髪師》編曲は 1903 年にウィーンの楽譜出版社 Universal Edition の求めでなされ、生活費の足しに行ったアルバイトの域を出ませんが、単なるピアノへの置き換えを超えた独自性があり、感性のきらめきが聴き取れます（編曲時、28 歳か 29 歳でした。なお、収録は序曲と五つのナンバーのみですが、シェーンベルクはオペラ全曲を編曲しています）。《ギヨーム・テル》序曲は 19 世紀のアメリカを代表するピアニスト、ゴットシャルク (Louis Moreau Gottschalk, 1829-1869) の編曲で、技巧的で壮麗なトランスクリプションに仕上がっています。

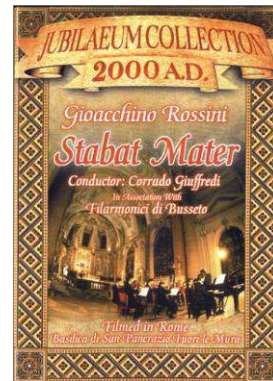
#### ▼木管・金管アンサンブル編曲のロッシーニ《スタバト・マーテル》DVD▼

◎Rossini: Stabat Mater (Jubilaem Collection 2000 A.D.)

ロッシーニ：《スタバト・マーテル》（紀元 2000 年記念演奏会。木管・金管アンサンブル編曲版）

収録：1999 年ローマ (Basilica di San Pancrazio Fuori le Mura) [Image Entertainment TE9588](DVD)

演奏：コッラード・ジュッフレディ指揮フィラルモーニチ・ディ・ブッセート



編曲作品の話のおまけに、ロッシーニ《スタバト・マーテル》の木管・金管楽器アンサンブル編曲の DVD も紹介しておきましょう。これは紀元 2000 年の聖年を記念して教皇ヨハネ・パウロ 2 世とパチカンが催したシリーズ・コンサートの一つで、ペルゴレージやボッケリーニの《スタバト・マーテル》は原曲どおり演奏されたのに、なぜかロッシーニ作品だけが木管・金管楽器アンサンブル編曲の演奏でした。DVD はそのライヴ収録で、演奏はちょっとゆるい気もしますが、現代のアレンジではなく「1842 年の編曲の復活演奏」とクレジットにあります。編曲者に関する情報は映像にありませんが、奏者の数と楽器編成からヨーハン・アントン・アンドレ (Johann Anton André, 1775-1842) が亡くなる直前に編曲し、1843 年にリコルディ社が出版したヴァージョンと思われる。

この DVD は廃盤ですが、アマゾンに在庫が 1 点あり、新品・中古も入手可能です。在庫分はメルマガを読んだ人の早い者勝ちなので、売り切れの節はご容赦ください。

#### ▼1 月 19 日、講演「日本におけるヴェルディ受容（明治・大正・昭和）」▼

オマケのオマケで、筆者が 1 月 19 日に日本ヴェルディ協会で行う講演のお知らせです。2013 年 1 月 19 日 (土) 午後 2 時開始。会場は上野の東京文化会館 4 階の中会議室 1。それなりに面白い内容だと思います。

詳細はこちらをご覧ください。<http://www.verdi.or.jp/> 事前の申し込みが必要かもしれませんので、お出でになりたい方は日本ヴェルディ協会事務局にお問い合わせください。<http://www.verdi.or.jp/contact.html>

なお、日本におけるロッシーニ受容に関する講演は、後日、日本ロッシーニ協会例会にて行います。

(2013 年 1 月 15 日 水谷彰良)